

Press Release 2023.12.13

東京オペラシティ アートギャラリー 2024年度の展覧会情報

4月11日 [木] - 6月16日 [日] *58日間

宇野亞喜良展 AQUIRAX UNO

同時開催：収藏品展 079 特別展示 没後 50 年 難波田史男、project N 94 大城夏紀



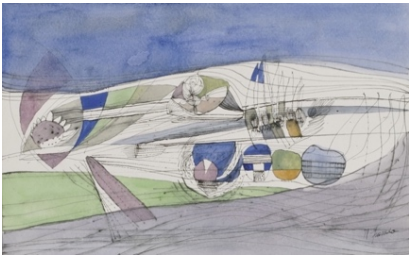
(左) 演劇実験室◎天井桟敷公演『星の王子さま』ポスター 1968 ©AQUIRAX

(右) 演劇実験室◎天井桟敷第5回公演『新宿版千夜物語』ポスター 1968 AQUIRAX

日本を代表するイラストレーター、グラフィックデザイナーとして活躍し続ける宇野亞喜良(1934-)。1960年代の日本において、「イラストレーション」「イラストレーター」という言葉を広め、時代を牽引してきたレジェンドでありながら、常に進化し続けています。その創作は、イラストレーション、ポスター、絵本、書籍、アニメーション映画、絵画、舞台美術など多岐におよび、1950年代初めのデビュー以来、活動の範囲は限りなく広がっています。本展は、宇野亞喜良の初期から最新作までの全仕事を網羅する、過去最大規模の展覧会です。1950年代の企業広告をはじめ、1960年代のアングラ演劇ポスターや絵本・児童書、近年の俳句と少女をテーマとした絵画など、多彩で貴重な原画や資料等を紹介します。「魅惑のサウスポー」から生み出される、時代を超越した宇野亞喜良の華麗で耽美な創作世界に迫ります。

担当：瀧上華

収藏品展 079 特別展示 没後 50 年 難波田史男



難波田史男
《無題》
1971
photo: 早川宏一

project N 94 大城夏紀 Oshiro Natsuki



和歌や漢詩など、伝統的な文学＝言葉をモチーフとして、その情景を視覚化、展開する大城。厳格な形式／様式、事物の記号化や見立てといったことに関心を寄せ、視覚化した最初の作品から見立てをずらしていくことで次の作品を展開させます。作家一人による連歌ともいべき作品です。

担当：野村しのぶ

《月傾きぬ No.2》2022 photo: 西山功一

7月6日 [土] - 9月16日 [月・祝] *62日間

高田賢三 夢をかける

同時開催：収藏品展 080 となりの不可思議 (仮称)、project N 95 田口薫



(左) 文化出版局 ©High Fashion 1970年6月号 photo: 岩田弘行

(右) 文化出版局 ©装苑 1972年3月号 photo: 岩田弘行



KENZOの創設者、高田賢三(1939-2020)は、日本人デザイナーとしていち早くパリに進出し、ファッション界の常識を打ち破るスタイルを次々と生み出しました。「木綿の詩人」と称賛され注目を集めた後も「衣服からの身体解放」をテーマに、日本人としての感性を駆使した新しい発想のコレクションでさまざまな試みを行い、後進の日本人デザイナーが世界へ進出する道を開きました。本展は「色彩の魔術師」と呼ばれた高田の変遷を衣装展示やデザイン画でたどるとともに、幼少期からのスケッチやアイデアの源泉となった資料、彼を支えた人々との交流を示す写真なども紹介します。2020年に惜しまれつつ他界した高田の没後初の大規模個展となる本展は、生まれ故郷の姫路と、学生時代を過ごした東京を巡回。日本人デザイナーのパイオニアとしての創作活動を回顧するとともに、未曾有の困難な時代を生き抜こうとする人類の未来に向けて高田が遺したレガシーの本質を発見できる展覧会です。

担当：福島直

収藏品展 080 となりの不可思議 (仮称)



落田洋子
《異常乾燥注意報》
1996
photo: 斉藤新

project N 95 田口薫 Taguchi Kaoru



キリスト教徒である田口は、宗教や信仰をテーマに作品を制作します。綿密なリサーチに基づき、歴史的な図像が引用された画面には、中世、東洋、近代などさまざまな絵画空間が取り込まれ、複数の時間軸が凝縮されています。

担当：瀧上華

《受胎告知》2023

10月3日 [木] - 12月17日 [火] *65日間

松谷武判 Matsutani Takesada (仮称)

同時開催：収藏品展 081 抽象の小径 (仮称)、project N 96 ナカバヤシアリサ



《雫》1985 photo: 斉藤新

パリを拠点に活動する松谷武判(1937-)は、60年を越える活動を通して、物質が示す表情や肌理(きめ)、存在感に生命の波動、流動を交錯させる優れた制作を続けてきました。1960年代に当時の新素材であるボンドを使って有機的フォルムを生み出す作品で具体美術協会の第二世代の作家として頭角を現し、1966年に渡仏。パリを拠点に版画制作に取り組み独自の有機的フォルムによる空間表現を深め、やがて幾何学的な色面による表現に移行します。のち改めてボンドによる有機的フォルムに鉛筆の黒鉛を重ねた作品で独自の境地をひらきます。2017年のヴェネチア・ビエンナーレ、2019年のパリ・ボンビドー・センターでの回顧展など、近年国際的な高い評価を得ています。キャンバスや紙、ボンドや黒鉛など、作品を構成するさまざまな物質が示す表情に生身の身体と五感で対峙することで生み出される松谷の作品、その豊かな多様性は、見る者を魅了してやみません。本展は、初期から現在までの作品、資料、映像などによって長きにわたる活動の全貌を紹介するとともに、その広い射程を今日的視点から検証します。担当：福士理

収藏品展 081 抽象の小径



白石由子
《Ripple》
1988
photo: 斉藤新

project N 96 ナカバヤシアリサ Nakabayashi Arisa



紙を支持体に、植物や風景に見える滲みを生じさせるナカバヤシの絵画。都市や自然の中で不自然な状態にある植物(枝を切り詰められた街路樹、人間の基準で外来種とされる植物)に着目し、これらに自分になったら、と仮定して描きます。物事は視点の変換によって多様に解釈しうることを感じさせます。担当：野村しのぶ

《A 地点から #01》2023

2025年1月11日 [土] - 3月23日 [日] *61日間

今津景 Imazu Kei (仮称)

同時開催：収藏品展 082 紙の上の芸術 (仮称)、project N 97 福本健一郎



《Memories of the Land / Body》2020 photo: 木奥恵三

今津景(1980-)は、様々なメディアから採取した画像をコンピュータを用いて加工を施しながら構成し、その下図をもとにキャンバスに油彩で描く手法で絵画を制作します。人間の知覚は、技術の発展と密接に関わっています。かつて写真や映画の登場がそうであったように、スマートフォンの普及やAIなど現代の科学技術の革新は、我々の知覚や空間認識、物事に対する考え方をますます変容させています。今津はそうした変化に呼応するように、美術史における新たな絵画表現を探求しています。2017年以降インドネシアに拠点を移した今津の近品は従来からのモチーフに加え、インドネシアの歴史や神話も題材としています。本展でも神話「ハイヌウェレ」を題材にした新作シリーズを中心に過去作品と合わせて全貌を紹介します。地球環境問題/エコフェミニズム、神話、歴史、政治、といった要素が同一平面上に並列される画面は、膨大なイメージや情報が彼女の身体を通過することで生み出されるダイナミックな表現といえます。国内外で大きな注目を浴びている今津の初の大規模個展です。担当：瀧上華

収藏品展 082 紙の上の芸術 (仮称)



人間安理
《Space Poem B》
1974
photo: 早川宏一

project N 97 福本健一郎 Fukumoto Kenichiro



福本健一郎は、植物や自然の様相を観察して、そこに人間の感情、感性を投影しながら制作しています。福本にとって描くことは、日々の生活のなかで、自然の本質を考え、把握するための探求にほかなりません。担当：福士理

《無題》2021

■お問い合わせ 東京オペラシティ アートギャラリー 【広報】市川靖子、吉田明子 Tel : 03-5353-0756 / Email : ag-press@toccf.com

オペラシティ アートギャラリー | 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2 tel: 03-5353-0756 fax: 03-5353-0776 e-mail: ag-press@toccf.com https://www.operacity.jp/ag/